

四月の統一地方選で、道内では四十六市町村長選と百二十六町村議選が行われ、このうち二十六市町村長選と三十三市町村議選が無投票だった。市町村長選では留萌管内初山別村が道内最多の連続十二回の無投票となり、市町村議選では過去最多の四町村議選で定数割れ。首長や議員の「なり手不足」は深刻だ。

なり手不足の第一の要因は、人口減だろう。かつては集落や、農林水産業などの業界団体が代表者を議会に送り込み、地域や業界のために「予算」を引き出す役割を担っていた。しかし、「限界集落」が増え、一次産業従事者の高齢化も進み、「代表」を送り出す力が失われた。

数年前、道東の農業地帯の議員が高齢で引退を決意し、同じ集落のめぼしい数人に後継を打診したが、「仕事が忙しくて、議員になるなんて無理」「家族が反対している」と全員に断られた。集落からは代々議員を送り出していたが、この議員を最後に途絶えた。

首長については、土日も各種行事や冠婚葬祭に顔を出さねばならず、災害などに備えるため深酒はもつてのほか。家族とゆつくり過ごす時間もない。以前、札幌出張中のある首長がサングラスを掛けて隠れるようにパチンコをする姿を見つけ、わずかな憩いの時間を邪魔しないようにと、見なかつたことにしたこともある。

「なり手不足」解消へ議会改革を

市町村の財政がひっ迫し、首長や議員の報酬は削減され、地域独自の施策に取り組む「裁量」は狭められている。首長や議員の仕事に、魅力を感じにくい現状であることは間違いない。

一方、首長や議員が、自らの仕事の魅力を下低させている側面もあるように感じる。国や道の補助金を当てにして、予算は全国の「成功例」のカーボンコピーのような施策の羅列。議会論議も「ひたすら反対」「やみくもに賛成」ばかりで発展性がない。採決に入ればなぜか全会一致で賛成。しかし、地域の実情にそぐわない事業が成果を上げるはずもなく、「予算をこなしただけ」で終わり、議会のチェック機能も働かないため翌年も同じような事業が繰り返される。小規模自治体の現実の光景だ。

なり手不足解決のためには、首長や議員の魅力を高めることが必要だ。もちろん報酬のあり方も検討が必要だが、「やりがい」をどう高めていくかに重点を置くべきだろう。

イギリスの政治学者ジェームズ・ブライスが「地方自治は民主主義の学校である」との言葉を残したように、住民にとって、地方自治体は最も身近な行政機関で、直接選んだ議員を通じて意見を反映させやすい場だ。地方議会議員が積極的に住民と地域の課題について意見交換し、「子ども登下校時の除雪をしつかりしてほしい」「老

朽化した町内会館を建て直して」といった声を吸い上げ、行政に届ける仕組みが必要だ。当然、住民の声を聞くだけでなく、議会の場で議論した結果がどうなったのか、報告する場も必要となる。十勝管内浦幌町議会など、議会改革の「先進地」とされている地域の取り組みだ。

こうした取り組みの積み重ねることで、地域住民に議員の仕事の重要性が認識され、議員自らも「地域住民の代表」としての誇りを感じ、その魅力が高まる。事実、浦幌町議選は四年前に定数割れとなったが、今回は定数十一に対して新人六人を含む十四人が立候補して選挙戦となった。地方議会の重要性が認識されれば、自ずと首長の仕事も再認識され、「なり手不足」解消につながるのではないか。

地域で「なり手不足」の課題について話を聞くと、「人材不足」という声をよく聞く。かつては役場や業界団体、企業といった一定規模の集団が「人材」を育成して供給していたかもしれない。しかし、行政や経営の効率化などで集団の規模が縮小し、人材供給システムが成り立たなくなりつつある。地域ぐるみで若手を育てる仕組みづくりが必要だ。もし本当に、地方自治を担う人材が見いだせないなら、自治体として「限界」を迎えているのかもしれない。

△魚▽